

朝日新聞 2013年2月26日



アトム通貨を手にする石渡正人さん＝麻生健撮影

2003年4月7日は何の日でしょう？ 東京・高田馬場の科学省で鉄腕アトムが生まれた日です。その日からちょうど1年後、アトムにちなんだ地域通貨「アトム通貨」が高田馬場・早稲田地域で始まりました。以来9年。地域通貨の多くが苦戦するなか、数少ない成功例だと自負しています。

秘訣（ひけつ）は商店街でも配布すること。地域通貨はボランティアの参加者に配られるのが通例ですが、アトム通貨の場合、加盟する店が企画したエコや地域に役立つプロジェクトに参加した人たちにも配ります。その分、発行額が増え、たくさん使われて、商店街を活性化します。その意味では、商店街の地域通貨とっていいでしょう。

高田馬場にある手塚プロダクションが地元への貢献を検討した際、思いついたのが当時話題の地域通貨でした。早稲田大のボランティア団体も地域通貨を考えていて、商店街組合が取りもって一緒にやることになった。こだわったのがアトム通貨という名称、デザイン、そして商店街での配布でした。

実は当初、お店は通貨配布に消極的でした。ところが、アトムの知名度で通貨の人気が高いと分かると、続々とプロジェクトが立ち上がりました。例えば中華料理店の「マイ箸プロジェクト」。もともとは箸持参の人に10馬力を進呈したのですが、一歩進めて箸と箸入れをセットで売り、店で預かるようにしました。土地柄、一人暮らしの学生が多く「安心する」と好評で、来店者数も、お店とお客さんのコミュニケーションも増えたといいます。

評判を聞きつけた全国の商店街から「うちもやりたい」と問い合わせがあったので、09年から全国展開をスタート。北海道から沖縄まで11支部に広がりました。みな厳しい状況を立て直そうと、がんばっています。例えば札幌市の発寒北商店街はシャッター街化が進むなか、09年にアトム通貨を導入したのですが、子どもを中心に人気が出て、「北海道いつてみたい商店街大賞」を受賞したんですよ。

アトム通貨はあくまでツール。でも使い方次第で商店街を元気にできる、すてきなツールです。地域の特色を生かし、うまく活用してほしい。ちなみに早稲田・高田馬場は「内藤とうがらし再興プロジェクト」に取り組み中。江戸時代、この地に植えられていた内藤とうがらしを復活。地域の人に育ててもらい、アトム通貨で買い取り、商店街のお店で調理し、アトム通貨を払って食べてもらう仕掛けです。楽しみです。

(聞き手・吉田貴文)

*

いしわたまさと アトム通貨実行委員会本部副会長 61年生まれ。手塚治虫の作品を扱う手塚プロダクションに入り、現在、クリエイティブ部長。アトム通貨には創設時からかわり、普及に努める